

文字をとりもどす

(4)

「わたしのわたしたち」(6) 平井識字学級

しかし、よみかきができなかつた私は、歌詞が読めず、福祉館に行つて漢字にひらがなをうつしてもらい、文字を練習するようにになりました。そうした時に識字学級に誘ってもらい「今日、何食べた？」といった日常のできごとを日記に書くことから始めました。先生や学習者の皆さんが良くしてくれるので、識字で習ったことを家に帰ってから練習し何も知らなかつた私が、ほんの少し文字を覚え、カラオケにもけるようになりました。最初は辞書を引くことさえできなかつたけど今は、知らない文字は辞書を引いたり、掛け算もメモ帳に書いて持ち歩いてい

ます。皆さんが、色々な所を話を聞きに連れて行つてくれる度に胸がいっぱいになり、先日も全国女性集会に初めて参加したのですが、偶然にも奈良の猿沢池の近くだったので昔の置屋にいた当時の思いがよみがえりました。

■私の夢
字を覚えたら、やってみたい夢があり、ようやくできあがりしました。私には、兄と年の離れた弟が3人いますが、一人娘に世話をかけないよう遺言書を書いて数珠と一緒に仏さんの所に置いていきます。宗派を問わない一心寺(大阪)に、

つれあひと一緒に入れて欲しいといった思いをつづつた遺言書です。

■これから
今は、毎日充実した日々を送り、月に一回は和歌山に住んでいる弟が家に訪れてくれ、孫も優しく来て泊まるときは一緒に寝てくれます。まだまだ元気で生きていきたいと思うので、皆さんに世話をかけると思いますが、識字学級をつうじていろんな事を、知ることができ自分も娘も変わったと思うので、今後いろいろな集会に参加し、自分の思いが発言できるような引張ってほしいと思います。(おわり)

2015年新春交礼

部落解放和歌山県企業連合会



中澤委員長の冥福を祈り、時代にそつた組織をとおあいさつする瀧口秀光・理事長

昨年11月23日に逝去された、故・中澤敏浩・県連執行委員長に、瀧口秀光・企業連理事長より「半世紀間にわたり部落解放運動の再生と発展につくされてきた功績をたたえらるとともに、心よりご冥福を祈る」とあいさつがあった。

また、今日の日本経済は、円安・株高などの影響により大手企業では業績回復がみられたものの、

部落の中小零細企業者においては、個人消費の低迷、原材料価格の高騰などによつて利益率が減少し、非常に厳しい経営状態となっている。さらに、昨年4月からの8%への消費税増税では、価格への転嫁が難しく、あらたな経営課題となっている。

企業連としては、経営指導の強化を徹底し、部落産業の育成と振興を押しすすめる、時代に対応しうる組織としてのとりくみが必要であると述べた。

次に、部落解放同盟和歌

山県連合会から、松本貞次・委員長代行より年頭のあいさつがあり、来賓を代表して藤本陽司・県商工観光労働部長、尾花正啓・和歌山市長よりあいさつがあった。

本年4月におこなわれる統一地方選挙において、組織内候補の藤本貞利子・県連特別執行委員と石本一也・県連執行委員の2人が紹介された。

その後、曾根義廣・和歌山県信用保証協会理事長による乾杯後、参加者全員で懇親を深めた。

【来賓】
藤本陽司・商工観光労働部長、青木茂二・商工観光労働総務課長、清水出・商工振興課副課長、野田寛芳・企画部長、北山芳宏・人権局長、更井俊児・人権政策課長、小

西佳美・人権施策推進課長
和歌山市
尾花正啓・市長、富松淳・総務公室長、豊田勝彦・まちづくり局長、有馬専至・まちおこし部長、瀬崎典男・商工まちおこし課長、上野哲生・都市計画部長、米澤範和・都市計画課長、山本彰徳・市民環境局長、平田謙司・市民部長、岡孝士・市民生活課長、辻岡公彦・市民課長、山下勝則・人権同和施策課長
日本政策金融公庫和歌山支店
金子英一郎・国民生活事業統轄、野村文雄・農林水産事業統轄、古味範久・中小企業事業部総括課長代理
和歌山県信用保証協会
曾根義廣・理事長、堀川与利人・常勤理事
和歌山商工会議所
上田賢司・事務局長
和歌山県商工会連合会
湯川恭英・事務局長
(株)紀陽銀行本店
小上隆・人事相談室長
顧問税理士
仁木靖夫、橋本義彦
顧問弁護士
藤井幹雄
顧問行政書士
新井悠喜雄

【祝電・メッセージ】
片山博臣・和歌山商工会議所会頭、岸本周平・衆議院議員、門博文・衆議院議員、鶴保庸介・参議院議員、世耕弘成・参議院議員
(順不同・敬称略)

部落産業の育成と振興を

企業連新春交礼会

「部落解放和歌山県企業連合会2015年新春交礼会」が1月16日、ダイワロイネットホテルで多くの来賓が参加のもとひらいた。

連載 (4)

今、伝えなければならぬこと (県連再建40年(6))

デッチあげ県連大会の強行、そして荊冠旗の奪還！

1974年8月18日、白浜町「坂田会館」は、特別な空気に包まれていた。この日、部落解放同盟県連執行部は、先の執行委員会と県委員会の議論や11支部からの申し入れ、さらには中央本部の勧告を無視し、第19回県連大会を強行しようとしていた。当日、早くから一部の労組に大動員をかけた、会場内外にビケを張っていた。入場者をチェックしていた。この日、会場内には、全支部からの代表員でなく、執行部に追従する同盟員や部落解放同盟とは無関係な一部労組員が占められていた。完全なデッチあげ大会を強行しようとの姿勢であった。そこに、11支部をはじめ県内各地から多くの部落大衆が駆けつけたのであった。なかには、県連執行部のメンバーも含まれていた。そこで、代表が話し合いを申し入れるが拒否され、会場入り口でビケを張っていた要員によって、入場ができないうまじ、押し合いになった。ヤジと怒号が飛び交い、騒然となった。なか、ビケ隊から「人間の皮を剥がれたケダモノ」という声が浴びせられた。一瞬の静寂の後「なに！」と一人の青年がビケ隊に飛び掛つた。部落住民からすれば、許しがたい言葉である。そのことがきっかけになり、会場入り口になだれ込んでいった。それを待ちかまえていたように、何台ものカメラのシャッター音が聞こえた。そうした状況のなか、別の青年たちが暴力をはね退け壇上まで駆け上がり、掲げられていた「荊冠旗」県連旗を手に、場外まで駆け出したのであった。

しかし、ことはそれだけではなかった。会場前で、県連大会をデッチ上げようとした執行部の暴挙への抗議集会をひらき、その後、デッチあげ会場を引き上げようとしたが、白浜警察署員らが彼らは、前日から要請を受けていたのであった。そこに、この日のことは、早速「アカハタ」は暴力によって県連大会が妨害されたとして報道した。しかし、真相はそうではないことが明らかであった。県連執行部は、特定の政党に追随し、部落大衆の願いと本部方針に背をむけてきた。しかし、そうした姿勢が次第にむき出しになり、やがて追い詰められるに至ったのである。とくに、11の支部からだされた、①松本選挙、②橋のない川、第二部上映、そして県連執行部が本部に謝罪したアカハタ記事問題など、返答に窮した県連執行部が、執行委員会や県委員会の議を経ないで「第19回県連大会」を強行しようとしたことが真相である。

この時期は、部落大衆にとつて極めて不幸な時期であった。一部の執行部の誤った方針や行動によって運動は大衆を離れ、迷走するに至っていた。

この日以降、水平社の歴史と伝統、先人たちの思い、戦後、西川県議差別事件糾弾闘争、勤務評定反対闘争を闘いぬいた和歌山県部落解放運動の再生に向けて精力的にとりくまれた。やがて、その成果は、10月8日の「第19回(再建)県連大会」というかたちで結実した。県内各地の部落からぞくぞくと結集するなか、上杉佐一郎・中央本部書記長は「この荊冠旗こそが、和歌山のきょううだいが掲げる唯一の荊冠旗である」と力強く宣言した。参加者の胸に万感の思いがこみ上げてきた。そして、この日、完全解放のよき日に向かって、新たな一歩がふみだされた。

(おわり)